

# 明治・大正期における女工意識の一考察

——「忠」「孝」分析を基軸として——

竹 下 景 子

## 目 次

はじめに	38
第一章 天皇制イデオロギーとしての「忠」「孝」の形成	40
第二章 天皇制のイデオロギー支配の機構としての教育	43
第一節 学校教育	44
第二節 工場教育	46
第三章 女工意識における「忠」「孝」	50
第一節 調査概要	50
第二節 天皇制イデオロギーの女工意識への浸透と乖離	57
あとがき	62

## はじめに

この小稿は、天皇制国家体制の最も重要な精神的支柱の一つをなすと考えられる「忠」「孝」のイデオロギーをとられ、その形成過程をあとづけ、さらにそのイデオロギーが現実にとどの程度当時の民衆の内に浸透し、意識の上に現われていたかを検討するものである。

この小稿が検討の対象とする時期は、明治後半から大正末期に至る時期である。本来ならば、天皇制イデオロギーと民衆意識をとらえるには昭和のファシズム期をも考察しなければならないが、その時期にまで検討を及ぼすことはこの小稿では省かざるをえない。

ところで、天皇制イデオロギーと民衆意識を統一にとらえることは思想史研究においても未踏の領域であり、発表されている研究はきわめて少ない状況である。この中において特に色川大吉、安丸良夫、鹿野政直氏等による研究は、民衆意識をとらえる上に多くの示唆を与えている。これらの諸研究に多くを負いながら、この小稿では次の観点、方法から考察を試みる。

## 観点

I 天皇制イデオロギー下の民衆意識を問うにあたり、それを把握するひとつの手がかりとして、次の理由から女工意識を考察する。

(1) 戦前の絶対的貧困な農村を供給源とし、農家経営の存続、窮迫せる家計補助のために自己の労働を賃労働として析出した女工は、戦前の民衆の典型である。

(2) 原料繭を国内で産出する製糸業は、軍需品等を輸入するために必要な外貨を獲得する輸出産業・戦略的産業部門であった。こうした製糸業のおかれた位置からして、製糸資本の蓄積を底から支える女工は、軍事生産体制・日本帝国主義を支える担い手としての自負心を持つことを国家、工場から要求された。この意味から、女工は天皇制イデオロギー教育と最も密接に関連した存在であったと考えられる。

(3)新潟、岐阜県の農村調査に参加した際、明治から昭和初期の製糸産業の発達を支えた女工であった方々に実際に会い、工場生活、当時の農村の状況等の話を伺う機会を得、女工に関する問題に関心をもったため。

## II 天皇制イデオロギーと民衆(女工)意識を、浸透・乖離の両面から考察する。これにより、

(1)天皇制の教化政策による民衆の精神の内面的規制力が如何なるものであったか。

(2)天皇制が造りあげた「理論体系」が民衆の精神的領域を意図した如くにはとらえることができなかったとしたならば、それは民衆意識のどの面であったのか。

が明らかにになると考える。

## 方法

民衆が自らの思想を書きとめることをしない過去の状況にあっては、過去の民衆意識を伝える史料を手に入れることはきわめて困難である。そのため、他のなんらかの手がかりを自らが捜しだし、そこから推測していく以外に方法はない。ましてや、歴史の流動期・変革期になんらかの行動を通じて現われた民衆意識ではなく、日常的な安定期に、しかも行動となって現われない民衆の内に内在化した意識の考察を試みた私にあっては、如何なる方法をもって問題解明にアプローチしていったら良いのか。今の時点で私の考える一つの方法は、実際に生存している当時の人々に会い話を伺う、その話の中から問題解明の手がかりを得るという「聞き取り調査」であった。だが、人間の記憶に頼るこの調査には障害がある。すなわち、聞き取りの企図するところが数十年前の意識考察にある限り、そこには忘却、なんらかの形での虚飾・歪曲があり、屈折された形で聴取者である私に伝わってくるという限界があることは否めない事実である。しかしながら、今の私には問題を解明する方法として、この「聞き取り調査」以外に見出すことはできない。勿論、障害があるという限界は常に念頭におかなければならないが。

以上、この小稿の趣旨、及び女工意識をとらえる際にとった方法・その限界性について述べたが、ともあれ、天皇制イデオロギー支配下の民衆意識をとらえる一つの試みとして女工の「忠」「孝」意識をみてみたい。

## 第一章 天皇制イデオロギーとしての「忠」「孝」の形成

天皇制イデオロギー支配下の民衆意識を考察するに先立ち、天皇制イデオロギーとしての「忠」「孝」の形成過程を主として修身教科書を手がかりにしてあとづけ、天皇制国家の人民支配のイデオロギー理念を概略的にみてみたい。

明治政府はその成立以来、教育の指導理念を「忠」「孝」の伝統的儒教道德を中核とする封建思想に求めるか、あるいは欧米の近代的道德を中核とする開明思想に求めるかで、動揺と変容を重ね続けた。明治五年に発布された学制<sup>(1)</sup>では、国家富強の課題のもとに個人主義的、功利主義的学問観の上にたった教育理念が唱えられたが、明治十三年、反政府運動たる自由民権運動が全国的な高揚に達すると、その高揚に直面した絶対主義国家の危機意識は教育政策の上にも反映し、政府権力安定の課題は次第に開明思想からの脱却と儒教道德による教育政策の復活を要請していた。

明治十三年には、天皇の名において「学制」下の教育を批判し、仁義忠孝を最も重視する前近代的儒教主義道德教育の構想を示した「教学大旨」<sup>(2)</sup>が公布された。この公布に伴い、政府は一連の反動教育政策——明治十三年、一部の修身教科書使用禁止<sup>(3)</sup>といった教科書統制政策、「改正教育令」による首位教科修身の成立、十四年の「小学校教則綱領」の公布、十五年の「幼学綱要」の頒布、十六年の儒教主義復活を目標とした「小学修身書」の発刊等々——をうちだし、儒教を天皇制国家への忠誠倫理として再編成するとともに、明治政府を支えるイデオロギーとして復活していった。その際、儒教を天皇ないし天皇制国家への忠誠に帰一させるために、石田雄氏<sup>(4)</sup>の教えるところによれば、従来の儒教的忠孝主義に「妥当範囲の下への拡大」と「上への集中」という二方向の修正、すなわち儒教的君臣の概念を「君」は天皇に帰一、「臣」を新たに臣民という範疇に切りかえる操作がなされたのである。以上の如く、「教学大

旨」以後、儒教に依拠すると同時にこれを再編することによって、天皇制国家の倫理はひとまず儒教主義に結実した。しかし、儒教主義は天皇制を支える精神的支柱として確固たる位置づけをされていたわけではなかった。なぜならば、儒教主義は国民の服従を喚起するだけで、天皇制国家の要求——国民の服従と自発性に支えられた国家の形成——を全面的に表現しうるものではなかったからである。そのため、明治十年代後半においても、天皇制国家の倫理を何に求めたら良いのか、国家の要求を全面的に現わしえる思想は何かをめぐって政府内で抗争が続いた。

こえて明治二十三年、日本国民の精神的典拠としての「教育勅語」<sup>5)</sup>(以下、勅語と略称)が渙発された。この勅語は、儒教主義道徳を絶対主義国民道徳の中に包みこみ、天皇制絶対主義への奉仕の強調をその内容としたものであった。ところで、この中であって人倫の本体、臣民道徳の基本として位置づけられている「忠」「孝」は、わが国の家族制度と国体との関連にたつて両者を接合する「忠孝一致」の思想としては、まだ明確に理論化されていない。しかし、勅語により確定された「忠」「孝」を中核とする天皇制国家確立のための倫理は、その後の人民教化の動かすことのできない原則として機能していく。

明治二十四年、「小学教則大綱」<sup>6)</sup>「小学校修身教科書検定標準」が公布された。これらは修身教授の原理は勅語の趣旨をもってし、教科書は国民道徳を内容とすべきことを明記したものである。こうした修身による人民教化、それは教科書の国家統制である国定制度<sup>7)</sup>の実施によりさらに強化されていた。ところで、この時期には日本資本主義の躍進が労働者の大群を生みだしつつも、増税・恐慌による賃下げ・失業問題等で労働者の貧窮を余儀なくしたために、各地で労働争議、また農村においても小作争議が勃発した。そのため、国民の服従と自発性に依拠した権力的支配を可能にする国家形成の動きが高まり、その手段として「忠孝一致」の思想が明確に理論化された形で現われてきた。では、「忠」と「孝」は如何なる方法をもって接合されたのであろうか。国定第一・二期修身教科書<sup>8)</sup>からまとめると次のようになる。

# I 天皇シンボルの創出と活用による接合。

天皇を一方では政治的領域における最高・絶対の権威として位置づけ、他方、精神的分野における唯一・絶対の価値

の体现者とする。すなわち、「政治的権威者」「精神的権威者」という二面の性格をもつ存在として天皇を位置づけることにより、「忠」と「孝」を接合する礎石を築く。（第三章第二節参照）

## Ⅱ 民衆の祖先崇拜の利用による接合。

民衆の祖先崇拜の念を利用した国家神道による基礎づけを前提として、

(1) 国家を家の拡大延長としてとらえさせ、家族に対する感覚的情緒Ⅱ孝を国家への忠誠Ⅱ忠へと拡大し、天皇・国家への民衆の服従・自発性を喚起する。この論理では、私的心情である「孝」を公的領域に拡大することにより権力を民衆の心情の内に内在化し、権力を権力として意識させることなく権力的支配への国民の忠誠心情を喚起するため、実体的権力関係が非常に内面化されているといえる。

(2) 神話における天皇と祖先との間の臣従契約を継承し、天皇に忠を尽すことが、親・先祖に対する「孝」に他ならないとする論理を正当化する。

## Ⅲ 民衆の通俗道德の国家への吸収による接合。

民衆の通俗道德の一つである「孝」に「忠」という国家的目標を与えて天皇制イデオロギーの中に組みこむことにより、両者を接合する。

ただし、天皇制は「忠孝一致」を説きつつも次のことを要求する。

Ⅳ 国家的利害と私的利害が一致しない時は、私的利害の否定を民衆に強要する。つまり、「忠」と「孝」の関係においても両者が一致しない時は、「孝」を否定することを要求している。

以上、非常に概略的に「忠」「孝」の形成過程を追ってみた。このように、天皇制は伝統的儒教道德である「忠」「孝」を再編することにより、自己の支配体制を支える最も重要な精神的支柱の一つとして人民に教化していったのである。

注

- (1) 文部省編『学制八十年史』(下) 七二〇頁
- (2) 国民精神文化研究所編『教育勅語渙發資料集』第一卷三〇四頁
- (3) 教科書統制の基準を明治十三年十二月十八日付文部省達に求めると次の通りである。「学校教科書ノ儀ニ付テハ迥テ示達スル儀可有之候得共国安ヲ妨害シ風俗ヲ紊乱スルカ如キ事項ヲ記載セル書籍ハ勿論教育上弊害アル書籍ハ採用セサル様予テ注意可致此者為心得相達候事」『明治以降教育制度發達史』第二卷・四九七〜八頁
- (4) 石田雄『明治政治思想史研究』二三頁
- (5) 前掲『学制八十年史』(下) 七一六頁
- (6) 同前書 七八三頁
- (7) 国定教科書制度が実施されたのは、明治三十六年四月であり、翌年の四月に第一期国定教科書の使用が開始されている。なお、第二期の国定教科書の使用開始は、明治四十三年四月である。
- (8) 海後宗臣他『日本教科書体系』近代編(三)所収の第一期・二期の小学修身書を用いた。

## 第二章 天皇制のイデオロギー支配の機構としての教育

本章では、天皇制のイデオロギー支配の機構としての教育をとらえ、特に小学校教育、工場教育に焦点をあてつつ、天皇制イデオロギー教化の様態を検討する。

## 第一節 学校教育

修身書の教授内容の分析はすでに行なったので、ここでは小学校教育における訓育活動についてみていく。

訓育活動の目的は、<sup>(1)</sup>道徳教育及び国民教育の基礎を造ることにあった。修身教科書に現われた言葉をもってすれば「よい日本人」を造ることにあったといえよう。では、よい日本人とは――修身教科書によれば次の通りである。

「我が国民は万世一系の天皇を戴き、克く忠に克く孝に、数千年来の美風をなせり、我等臣民たる者は常に天皇陛下・皇后陛下の御高德を仰ぎ奉り、祖先の志を継ぎて忠君愛国の道に励まざるべからず。父母には孝行を盡して其の心を慰め安んじ、兄弟互に力をあわせて家門の繁栄をはかり（中略）是等の心得を守るは明治二十三年十月三十日に下し賜いし勅語の御旨趣にかなひ奉ることとなるなり。されば人人勅語の御旨趣を深く心に銘してよき日本人とならんことに努むべし」（第二期尋常修身書巻六）

これによって知られるように、勅語の趣旨を心にきざみ、忠孝を基本とする臣民道徳の実践に努める者をよい日本人として育てている。ここから訓育の主目的が児童をして勅語の趣旨を十分に体得せしめ、天皇制を支えていくべき臣民としての育成することになったことは明らかであろう。したがって、義務教育機関である小学校において訓育を行ない、その徹底を期し、十分な効果をあげるべく努めることは国家にとってきわめて重要であった。

では、訓育の目的達成のために如何なる方法が講じられたのか。各小学校は訓育を的確に施すために種々の方法を講じたが、その中において訓育本来の目的達成に欠くべからざる方法として重視されたのは規範的訓育である。以下、この訓育方法を各小学校の例を参考にしつつ、概括する。

### 規範的訓育方法

#### I 訓育綱領・要目の選定

学校における訓育を如何なる目的をもって行なったらよいかを、勅語及び修身教科書に準拠して定めたもの。各学校はこれに従って組織的・系統的に訓育を行なうことを試みていた。

#### I 校訓

前述した訓育綱領の趣旨を児童の理解が可能な程度に簡易な語で表わした、児童の修養上の基礎となるべき教訓。学校側は校



訓を児童に示し、暗誦させることにより、その趣意あるところを体得させることに努めた。

## 「二例」長野県松本尋常高等小学校<sup>(3)</sup>

- 1 親愛・公正・剛毅（女子は従順）を旨とし、以て勅語の御趣意を奉体し忠孝の道を全くすべし
- 2 常に学校の体面を重んずべし
- 3 謹んで長上の命令に服従すべし
- 4 衆と事を與にせば必ず協同一致すべし
- 5 身体を強健にし勤勞の習慣を養うべし

## I 児童心得

日常生活において児童が実践すべき事項を列举し、その実行を促したもの。

## 「二例」栃木県師範学校附属小学校<sup>(3)</sup>

- 1 教育勅語の御旨に従い校訓を守ることを片時も怠るな
- 2 「私は某である」と我が名を重んじ自ら慎み恭くすることを怠るな
- 3 「私は某の子である」と親の名を重んじ父母祖先の名誉を揚げんことを心懸けよ
- 4 「私は栃木県師範学校附属小学校の児童である」ことを忘れずに常に学校の名誉を耀さんことを思え
- 5 「私は大日本帝国の臣民である。畏くも万世一系の天皇を戴くものである。」ことを考えて苟にも軽々しき事をするな

(後略)

## I 儀式

訓育の目的達成のために必要不可欠なものとされ、特に国家的祝祭日儀式は訓育活動の集約点として評価・重視された。天皇制は儀式の細部に至るまで画一化を推し進め、天皇の△分身△とされた御真影への拝礼、勅語の奉読、校長訓話、国家・式歌の斉唱等を儀式内容として定め、国家祝祭日の△感銘△を深化させることを図った。

## △儀式内容△「小学校令」施行規則第二八条<sup>(4)</sup>

紀元節、天長節及一月一日ニ於テハ職員及児童、学校ニ参集シテ左ノ式ヲ行フヘシ

1 職員及児童「君カ代」ヲ合唱ス  
 2 職員及児童ハ天皇陛下、皇后陛下ノ御影ニ対シ奉リ最敬礼ヲ行フ  
 3 学校長ハ教育ニ関スル勅語ヲ奉読ス  
 4 学校長ハ教育ニ関スル勅語ニ基キ聖旨ノ在ル所ヲ誨告ス  
 5 職員及児童ハ其ノ祝日ニ相当スル唱歌ヲ合唱ス  
 こうした規範的訓育等の訓育活動は、児童を天皇制に奉仕する臣民として育成することが学校教育を通して如何に強力、かつ執拗になされていたかを示すものであった。

注

- (1) 前掲『学制八十年史』（下）七七三頁の小学校令第一条
- (2) 小学教育研究会編『訓育方面の研究施設』一二五頁
- (3) 金港堂編集部編『全国附属小学校の新研究』四一五～四一六頁
- (4) 前掲『学制八十年史』（下）七九一～七九二頁。なお、祝祭日の儀式については佐藤秀夫「わが国小学校における祝日大祭日儀式の形成過程」に詳しい。

第二節 工場教育

製糸工場において工場経営上の理由から教育が必要とされたのは、製糸業が年中作業の工場工業として成立してからであった。工場工業の確立・発展のためには、寄宿舎制度を設け遠隔地からの女工募集を可能にするといった労働力の量的確保と、作業能率を増進させ優良生糸を製造するための労働力の質的向上を図ることが必要となる。そのた

め明治末～大正時代にかけての工場では、寄宿舎制度下におかれたために家庭における教育・修養期間が失われた女工を対象に、工場が家庭にかわって教育・修養し、また優良生糸製造のための製糸に関する専門的技術教育を行っていた。こうした工場教育はその目的及び方法から以下のように分けることができる。<sup>(2)</sup>

### 補習教育

由 来：日清・日露戦争にかけての器械製糸を主軸とした製糸業の急速な発展Ⅱ工場数・釜数の増加は女工の払底を招来したために、工場内に文部省認可の私立小学校を設置し、職務のかたわら無料で教育を受けさせるという条件の下に、十才にも満たない義務教育未終了者を多数募集・雇傭し、女工不足の解消を図った。この補習教育制度は、義務教育未終了の幼年工を雇傭するために工場側が詮方なく設けたものといえる。

教育期間：大抵九・十月ノ翌年の三・四月迄で修業年限は工場により異なる

授業時間：終業後一時間半～二時間Ⅱ六時半または七時始まりの八時半、九時放校

教師：1 会社の役員が兼務

#### 1 専任の講師

1 附近の小学校または女学校の教師を嘱託

教材：検定、国定教科書あるいは工場自らが編纂した教科書

### 修養教育

目的：女工の品性修養（主に工場における諸徳実践の奨励）

方法：講話、説教会、図書、新聞、雑誌の閲覧及び発行、工場歌の制定等、

### 技術教育

目的：製糸に関する専門的技術の教授

ここでは天皇制イデオロギーの教化にかかわりをもつ補習、修養教育の内容考察を試みる。なお、両者は教育方法を異にするが内容を基本的には同じくするために、両者を総合してみていく。その際、

・工場側独自の編纂書である、諏訪郡交替休業制工場主組合発行『女子国語読本』巻一、二（昭和六年発行）

・埼玉工業懇話会編『工場教育教授細目』<sup>(3)</sup>

・聞き取り調査で得た当時の女工の話による講話、説教会の内容を資料とする。

補習・修養教育は、①わが国固有の家族制度に適する貞淑温良な良妻賢母の養成、②工場に都合のよい女工の形成を主眼としたものである。その内容は以下のように整理できよう。

①親との関係、舅姑、また夫との関係において、女性は自我、個性をも没却し絶対服従をもってつかえることを義務づけられる。これは、それらの人間関係を通して、「権威への絶対服従」に何の疑問も持たない女性をつくりあげることを企図したものであろう。こうして形成された女性には、「家」制度下にあつて自分が払ってきた犠牲と同様の犠牲を目下の者（子供）に要求する母親となる。すなわち、権威への絶対服従の精神は子供にもうつけられ、彼らは生命を投げうってまで国の最高の権威者である天皇に奉仕する忠良なる臣民として形成されていく。このような家族制度に適する良妻賢母（「権威に対してロボット化した人間」となることを、女工の将来の理想像として強調している）。

②工場での勤勉、儉約、忍耐等の諸徳目の実践が、ひいては君に忠、親に孝となるという一種の経済的・道徳的合理性に女工をいざなう論理を次に述べる方法をもって形成し、その教授を通して工場に都合のよい女工の形成を試みていた。

農業経営の零細、農業技術の低劣、農家経済の脆弱性等の経済的条件をもつ農家にあつては、他の農家との相互依存関係―労働力の相互提供、林野用水の共同体的維持利用等―なしには、生産も生活も一日たりとも維持できない性格をもつ。こうした農村の共同体的関係は、次第に社会的拘束として農民に作用したために、彼らは主体的意識と行動を許されず、行動の主軸を世間体におくようになる。工場は女工の供給源であるこの農村の性格、農民の意識を巧みに利用し、工場内の労働評価が村に伝わり、家の体面さらには嫁入りにかかわるのを怖れる女工を、各村の共同体を組織単位とした労働者編成、寄宿舎制度下に縛りつけたのである。このような工場における村的人間関係を利用し

た労働環境を背景に、道德面、経済面から女工の労働意欲をかきたて、工場の利<sup>1</sup>君に忠<sup>2</sup>親に孝とする論理形成を可能にした。

道德面…輸出を通じて戦艦等を買う位置におかれた製糸業に従事する女工が労働に励むことは、国の財政を助けると同時に君に忠を尽くすことになる<sup>3</sup>と説き、女工に職業的自負心をもたせる。

経済面…複雑な賃金決定制度、優等工女制度を設け、工場での真剣な労働の実践は自己の収入を増し、ひいては多額の送金による家計補助を可能にすることを説く。

以上、工場教育の内容を概略的にみたが、最後にその効果について簡単に記しておく。

工場教育は、数十時間にわたる過重労働後に行なわれるといった労働条件との関連、女工の教育に対する無関心等から、実際にはその実施さえも困難であった。そのため工場は、就業を一時中断して強制的に行なう、菓子等を与えて誘導する等の実施策を工夫した。しかし、その結果は思うようにいかず、工場主をして次の言葉を言わしめたのである。<sup>4</sup>「教育ハ世間欺マシ丈ケ<sup>5</sup>實際効能ハナイデス。」<sup>6</sup>「工場教育は実際に行はれ得べきものにあらず。」このように、工場教育は工場側の意図したほどには効果をあげることができなかった。

# 注

- (1) 郡是、片倉、鐘紡等の大会社は別として、中小工場、特に小工場においては工場教育を実施していない工場が多々あった。
- (2) 工場教育を知るにあたっては、次のものを参考にした。
  - ・『郡是製糸株式会社四十年史』、『片倉製糸紡績株式会社二十年史』、『鐘紡製糸四十年史』、『職工の福利増進施設概要』、『平野村誌』、『工場ニ於ケル職工救済其他慈善的施設ニ関スル調査概要』、『社会政策時報』一〇四号
- (3) この書は、国定教科書を使用した工場での補習教育の実施にあたり、埼玉工業懇話会が各工場の参考にするとの意図をもって教授担当者の特に留意すべき事項をまとめたものである。大正九年に編纂。

- (4) 『明治文化全集』十六卷  
 (5) 『職工事情』附録二、一一六頁  
 (6) 前掲『明治文化全集』十六卷。工場教育の効果は、明治期、大正期では顕著な相違はなかったようである。なお大正期の工場教育の効果については『社会政策時報』を参考とした。

### 第三章 女工意識における「忠」「孝」

#### 第一節 調査概要

聞きとり調査の方法は、次の通りである。

調査対象 岐阜県吉城郡在住の三十一名<sup>(1)</sup>

人数	生年
一人	明治三年生
二	二十三年
二	二十七年
五	二十八年
一	二十九年
一	三十一年
二	三十五年
三	三十六年
二	三十八年
三	三十九年
二	四十一年
一	四十二年
一	四十三年
一	四十四年
二	四十五年

(二名不明)

調査方法 一人一人に直接会い、問答形式で考えを収集。

(2)  
＜調査表＞

	質 問	回 答	人数
I	(1) 生 家 の 職 業	農 業 鍛 冶 屋 道 路 工 夫 靴 屋	28 1 1 1
	(2) 生 活 状 況	<p>一板ぶきの家はなく、町内の人と、仲間と一緒にかやをとってきて、今日はどこ、明日はあっちの家と家をつくって歩いた。こんな家でも30年はもちました。そして貧乏人は、土の上にわらをひいて、その上にむしろをひき、客がみえると、すげむしろをひいた。</p> <p>一小作農家の敷物といえば、わらむしろを敷き、甚しい所では、わらをそのまましいている家もありました。</p> <p>一自給自足、お米にむぎ、ひえ等をまぜて主食とし、おかずは漬物と野菜の煮物等で、魚等は正月とお祭り位で、肉は食べぬことにしていました。</p> <p>一小作人は米年貢を納めるのが精一杯で、あまり米は食べることができず、ひえ、いもに少しづつ米を入れ主食とし、漬物、味噌等にて主食を補っていた。</p> <p>一米の飯をいただけるのは盆か正月位で、平常は雑穀7分、米3分の割でたいたものをいただきました。</p> <p>一昔は今とちがって金の入る道がなかった。百姓が5反耕して6俵やそこらとっても、4俵半の米を納めなければならないし、また不作の時には、そんねんとれないし、4月頃まで、こちら雪がありましたで食べるものがねえんです。</p> <p>一着物が破れたらつぎきれをあてて着、寒い時にはつぎきれに顔をつつみ、寒さを凌いだ。</p> <p>一着物は全部木綿物で、自分で織った</p>	

	ものをきていた。羽織はきたことがなかった。どうまり、はんでんだけでした。	
(3) 小 学 校 在 学 期	(イ) 全然教育を受けていない。 (ロ) 義務教育中途退学 (ハ) 同 卒業 (ニ) 高等小学校中途退学	1 1 27 2
(4) 教 師	(イ) 教師の言動は全て誤りなく正しいものと信じ、教師を尊敬していた。 (ロ) 教師故に言動が全て正しいとは思わず、尊敬できる教師とそうでない者とがいた。	30   1
(5) 修 身 の 授 業 (31名の回答は全て 右の4種の回答に集 約できる)	一良い教えだと思い、守らなければならない教えであると思った。 一楽しみにしていた。親に孝、君に忠が本当に自分の中に入ってきた。 一興味、おもしろみは別として、守らなければならない教えまた実行しなければならぬ教えだと思っていた。 一本当に親達が言ってくれるようなことが、よくわかるように教科書には書いてあった。	
(6) 教 育 勅 語	(イ) 教育勅語の意味をよく理解し、また暗誦していた。 (ロ) 教育勅語の意味は理解していたが、暗誦はしていなかった。 (ハ) 教育勅語の意味は半分理解・暗誦していた。 (ニ) 教育勅語の意味はわからず、また暗誦もしていなかった。	23  1  3  4
(7) 紀元節・天長節が 何の日であるか知っ ていましたか。	(イ) 知っていた (ロ) 休日であることは知っていたが、何の日であるのか、知らなかった。	30  1
(8) 紀元節、天長節は 貴方にとって、どう いう意味をもつ日で したか。(回答は右 の4回答に集約でき	一この日のためにつくった着物をきて、自分が一番盛装できる日でした。 一大きなおまんじゅうがもらえ、食べることができるので一番楽しみにしていた日でした。	



	る)	一どんなに貧しくても袴をはいて出かけることができたので嬉しかった。 一大勢で講堂に集まったりすることが、楽しい日でした。	
II	(1) 貴方は天皇が国民を愛しそのために日夜尽力されていると、心底から思っていましたか。	(イ) 思っていた (ロ) 思っていなかった (ハ) その他 (回答なし)	22 5 4
	(2) [(1)に肯定の立場をとった22名を対象に] 教育の普及、日清・日露戦争の勝利等を、全て天皇の御仁慈と信じていましたか。	(イ) 信じていた (ロ) 信じていなかった (ハ) その他	22 0 0
	(3) 日露戦争後、あるいはその他の時期にあっても、度々不況がおそい農民の生活は困窮をきわめたが、その時にあっても天皇の御仁慈を信じていましたか。(右の3回答に集約できる)	一何事もその日その日を感謝して送る。災難があっても、これ位でありがたかったと思い、天皇の御仁慈を信じている心はかわらなかった。 一天皇の御仁慈はかわらないと思っていた。時期がきて云々ということは考えられなかった。 一そんな時でも、天皇の御仁慈を疑う気持ちなど、全然持たなかった。そんなこと感じることは絶対なかった。	
	(4) 天皇の御仁慈を天皇の恩と思っていましたか。	(イ) 思っていた。 (ロ) 思っていなかった。 (ハ) その他	17 4 1
	(5) 天皇は貴方にとって、どういう存在でしたか。	一生神様と仰ぎ奉っていた。 一日本で一番立派なお方であると思っていました。 一天皇陛下は神様で、じかにみると目がつぶれてしまう、世界中で一番偉い人であると思っていた。 一天皇様は日本で一番偉いお方で、何事も天皇様のおかげであ	

(6) 天皇に「忠」を尽くすとは、具体的にどのようなことをすることだと考えていましたか。

り、ただただ尊いお方であると思っていた。

一天皇は現人神であり、大日本帝国で一番偉いお方で、我々人民をいつくしみ下さり、わが子とも思い下さる、やさしいお方と信じておりました。

一天皇という人は尊敬していた。天皇があるから国が治まっていると思っていた。天皇をみると目がつぶれるほどに偉い人だと思っていた。

一親より偉い人だと思っていた。そう思っている、親はみずにおれんが、陛下は国でみてくれる。

一天皇は神様とは思っていたが、身近に感じていなかったため、なんという存在じゃあなかった。

一天皇なんて自分の仕事に関係のない人だと思っていた。が仕方なしに警察がこわいから、天皇のため、国のためといっていた。

一工場をよく働いて、生糸を外国に輸出することが、君に「忠」になると思っていた。

一工場で一生懸命働くことは親に孝を尽くすことになるし、働いたお金で税金を納めるのだから、君に「忠」になるとも考えていた。

一教科書に書いてあるような良い日本人となることが「忠」であると考えていた。

一戦争が起きたら、国のために命を捨てて、国を防衛することを「忠」であると考えていた。

一親に孝行することが、君に

	<p>「忠」を尽くすことであると考えていた。</p> <p>—天皇陛下に「忠」を尽くすなんて考えたこともなかった。そんなことは考えずにすごしてきました。</p> <p>—わかりません。</p>	
(7) 天皇対国民の関係を親子の関係と考え、天皇を大御親であると思っていたか。	<p>(イ) 思っていた。</p> <p>(ロ) 思っていなかった。</p> <p>(ハ) その他</p>	<p>12</p> <p>13</p> <p>6</p>
(8) 自分の先祖の系譜をたどると、それが天皇の系譜につながると教えられてきたわけですが、貴方は、そう思っていましたか。	<p>(イ) 思っていた。</p> <p>(ロ) 思っていなかった。</p> <p>(ハ) その他</p>	<p>0</p> <p>31</p> <p>0</p>
(9) 親に「孝」を尽くすとは、具体的にどのようなことをすることだと考えていましたか、	<p>—一生懸命に働いて、親の生活を助けることが、親に孝行することだと思っていた。</p> <p>—親に逆わぬことだと思っていた。</p> <p>—親に恩があるために、素直に親のいうことを聞き、お金を一銭でも多く入れることが「孝」であると思っていた。</p> <p>—親に心配をかけずに、親のためならどんなことでも一生懸命につとめ、真実な人間となることが「孝」だと思っていた。</p> <p>—親を大事にすること。</p> <p>自分の働いたお金で親をどれだけでも楽に暮らせるようにしてあげること。</p> <p>—子供が稼いで、親を手助けして、親を喜ばすこと。</p>	
(10) 天皇に「忠」を尽くすことが親に対する最高の「孝」であると思っていたか。	<p>(イ) 思っていた。</p> <p>(ロ) 思っていなかった。</p> <p>(ハ) その他</p>	<p>1</p> <p>30</p> <p>0</p>

(11) 親に「孝」を尽くすことは、同時にそれが天皇に「忠」を尽くすことになると考えていましたか。	(イ) 考えていた。 (ロ) 考えていなかった。 (ハ) その他	25 3 3
(12) 当時の自分の生活を顧みて、親に「孝」と君に「忠」では、どちらが大切でしたか。	(イ) 親に孝の方が大切であった。 (ロ) 君に忠の方が大切であった。 (ハ) その他	31 0 0

## 注

- (1) 調査対象とした人数が少人数であるために、調査から得られた結論を問題解明の糸口としてよいか、私にも疑問である。しかし、家庭、生活、教育環境を同じくする者には、ここで得た結論と同様のことがいえるのではないかと考える。
- (2) 調査表には、調査の全容ではなく、この小稿を書くにあたり特に参考とするものを書き記した。

## 第二節 天皇制イデオロギーの女工意識への浸透と乖離

天皇制は前述した如く、政治的支配服従の關係に家族間の心情を援用し、家族に対する心情を国家の忠誠へと拡大することにより、天皇ないし国家への民衆の服従・自発性の喚起を図った。換言すれば、第一章で述べたイデオロギー的媒介・手段を案出して「忠」と「孝」を結びあわせることにより、天皇制への民衆の自発的忠誠心をひきだそうとしたのである。したがって、天皇制イデオロギーが女工の意識へ浸透したか否かを判断する一基準は、女工意識において「忠」と「孝」の接合、「忠」の「孝」以上の高い価値づけがなされていたか否かにおかれると考える。この判断基準を念頭におきつつ、ここでは天皇制イデオロギーの女工意識への浸透程度をみていく。

まず、天皇制の支配思想形成の基礎である天皇のシンボル操作が女工の意識にどのように現われていたかをみてみたい。調査表〔Ⅱ〕―(1)と(5)は、天皇制の創出、活用した天皇シンボルが、女工意識に天皇への無限の幻想となって現われていることを示している。こうした天皇シンボル教化の成功は、女工意識に「忠」と「孝」を接合する礎石を築いたことを意味する。つまり、天皇への幻想は次第に女工の内に拡大し、理性的判断を超越した天皇・国家への絶対的帰一の忠誠心情をつくる可能性をもつからである。女工が天皇崇拜の念をもつことは、天皇を唯一の精神的権威者として認めたことになり、女工の精神的権威への忠誠のあかしは、天皇が同時に政治的領域における唯一・絶対の最高権威である以上、現実の行動として現われざるをえない。したがって、女工の側としては、現実の具体的行動において天皇の指示を受容することになり、逆に天皇制側としては、それを強要する根拠を得るという一連の關係が形成される。ここではまだ「忠」と「孝」との關係が明確ではないとしても、「忠」を強要する体制が形成されたことになる。そのため、あと支配者にとって必要なのは、女工の素朴な意識として存在する「孝」を、「忠」を強要する論理の中に繰りこみ、かつその論理そのものを女工の意識にうえこむことであった。しかしながら、本来異質なものである「忠」と「孝」を接合することが一つの人為にすぎない以上、その接合が含みもつ矛盾の解決はなしえない。そこで天皇制は以下にみるように、民衆の道德生活、精神生活の中にまで支配の根をおろして、両者の接合を図ろうと

した。

自己を祖先から子孫へと連なる一系の生命の流れの一環として位置づけていた民衆の精神生活の中心は、祖先崇拝<sup>(2)</sup>であった。この祖先崇拝は、民衆の永遠の生への願望を基調とした民衆独自の神觀念の現われであった。天皇制はこの民衆の祖先崇拝の念を利用して「忠」「孝」を結びあわせようとした。そのために天照大神を天皇の皇祖神としてあらゆる神々の最高位にしたて、天照大神の一系の子孫たる天皇を人民の親とする擬制の論理を形成したのである。この論理は教育政策、あるいは色川大吉氏<sup>(3)</sup>が言われたように、民衆の伊勢神道の信心の利用、招魂社による民衆の祭祀の代行等の方法をもって民衆に教化されていった。

しかし、その天皇制の意図は破綻していることが調査表から明らかであろう。民衆独自のものであり、当時の民衆の精神生活の根底におかれた祖霊信仰は、天皇制の政治的意図からつくりあげられた神信仰とは結びつきえなかったのも当然であった。

ところで、天皇を親とする論理形成の手段を否定したにもかかわらず、天皇を親としてとらえている者が全体数の約<sup>3</sup>を占めていることに注意したい。これは何を意味するのか。おそらく、私の推量であるが、擬制の論理が教育政策等を通して執拗に強調されたために、女工の内に次第に擬制としての親和感がひろがっていったためではないかと考える。

では、民衆の通俗道徳の天皇制への吸収による「忠」「孝」の接合は、女工の意識にどう現われているのだろうか。

日本資本主義の圧力、寄生地主の高率小作料下に緊縛された小作人は、生活の再生産、各々の家族員の生命維持のために黙々と働かざるをえなかった。しかしながら、常に土にくっついて食料を獲ることへのみ腐心しつつも、地主への年貢納入後はわずかばかりの自家保有米で細々と暮らしていかなざるをえない彼らの生活は、調査表〔I〕―(2)が示すような困窮をきわめたものであった。こうした経済的肉体的な重圧下におかれた小作人の生活環境の中で育成したその子供達は、自己の労働・収入が親の生活を助け、家族の再生産を可能にすることを幼少時から感じつつ成長した

ために、親に対する情<sup>II</sup>孝意識を自己の内に強く持っていた。この「孝」意識の本質は女工の「家」エゴイズム<sup>(4)</sup>とはいきれないまでも、日本資本主義の非人間的圧迫が女工に強制した人間の情の発露による「家」(狭義の意味では親の生活の援助)維持の性格をもつと考える。

天皇制はその「孝」意識をとらえ、天皇制的な意義づけを付与することにより、「忠」と「孝」の接合を図った。つまり、「孝」に「忠」という国家的目標・価値を与え、「親に孝を尽くすことは、天皇に忠を尽くすことになる」、さらには、「天皇に忠を尽くすことは、親に対する最高の孝である」という論理形成のもとに、その実践を奨励したのである。では、この天皇制の意図は達成したのであろうか。

調査表(II)―(10)(11)(12)をみると、「孝」を天皇制に組みこむ操作は、成功した面と成功しえなかった面をもっていたことがわかる。女工の通俗道徳である「孝」は、国家の吸収可能な面と、不可能な面の二側面をもっていた。国家が吸収できる面とは、女工の利と国家の利とが何の矛盾もなく一致している時、いいかえれば「孝」と「忠」が並列的次元で位置づけられる場合である。また吸収できない面とは、女工の利と国家の利が一致しない時、いいかえれば「孝」が「忠」に吸収され、「忠」により高い価値がおかれる場合である。親と子の関係が最も自然な、肉体的直接的関係である以上、親に対する「孝」が女工の生活に根ざし、かつ内面に深化したものである限り、天皇制が如何にすぐれた論理を形成し民衆の精神的・道徳的領域に支配の根をおろす操作をなしても、「孝」意識は総じてとらえることができなかったといえよう。

ふりかえってみれば、天皇制は自己の支配体制を支えるべき民衆の忠誠心情・行動の喚起を、「忠孝一致」を正当化した支配思想の形成とその教化に求めた。しかしながら、天皇制イデオロギーが本来相容れない「忠」と「孝」を中核として形成されたために、現実の生活過程における「忠」と「孝」とが絶えず乖離する可能性をもっていた以上、イデオロギーとしての効率は低いものであったといえよう。このようなイデオロギーの体質は、暴力あるいは教化政策の強化による弱点の補強を不断に要求し、ここに天皇制が暴力国家、教化国家としての性格を揚棄できない原因があったのではあるまいか。

以上、調査表から得た結論を総括するならば、天皇制イデオロギーの中核をなす「忠」「孝」は、明治後半から大正末期においては、予想されるほどには女工意識に浸透しえなかったということができよう。

## 注

(1) 天皇のシンボル操作が如何に成功したかをみる参考資料として、東京モスリン株式会社調査課発行『女工員訓育資料』（大正十三年発行）から女工の理想の人物に関する調査の結果を記しておく。

## 理想の人物（昔の人）

番人ハ誰				人員数	番人ハ誰				人員数
デ	中	人	ノ		デ	中	人	ノ	
一	フ	思	ト	昔ノ偉	一	フ	思	ト	昔ノ偉
誰	人	カ	ス	デ	誰	人	カ	ス	デ
				名					名
皇次郎	天金次	武宮皇	神二天	92	尼樹妻	禪藤壹	下江鶴	松中瀧	2
下神	陸大	照皇太	天照皇	86	天皇貞	天義	江鶴醍	中瀧後	2
神閤	大	正	天照皇	83	貞	おで	醍醐	瀧後新	2
成	豐ノ	一	天照皇	77	石昇	白	田上	新井	2
妻公			天照皇	74	盛		井邊	新井	1
行			天照皇	57	盛	實	邊	渡	1
皇子			天照皇	36	ノ妻	軒	藤	齋	1
子			天照皇	25	母	ノ	生	稻	1
正將			天照皇	22	妻	門	恒	水	1
長部			天照皇	16	下	ノ	兵	鈴木	1
様			天照皇	13	局	殿	右衛門	今右衛門	1
康			天照皇	12	師	下	衛門	ナイチン	1
様			天照皇	10	導	局	宮	ゲル	1
尊			天照皇	9	子	大	日	北	1
言			天照皇	9	子	訓	大	春	1
經			天照皇	8	所	子	野	弘	1
母			天照皇	7	門	門	政	小	1
ノ			天照皇	7	朝	朝	戸	孔	1
信			天照皇	6	皇	皇	賴	孟	1
洲			天照皇	6	佐	佐	天	北	1
山			天照皇	5	母	母	中	水	1
助			天照皇	5	軍	軍	ノ	源	1
玄			天照皇	5	名	名		仁	1
郎			天照皇	5	臣	臣		広	1
曆			天照皇	4	介	介		ワ	1
后			天照皇	4	頼	頼		シ	1
様			天照皇	4	子	子		ト	1
迦			天照皇	3	一	一		ノ	1
光			天照皇	3	已	已		将	1
子			天照皇	3	計	計		大	1
			天照皇	3	秀	秀		総	1
			天照皇	3	太	太		谷	1
			天照皇	3	保	保		豊	1
			天照皇	3	一	一		聖	1
			天照皇	3	計	計		塙	1
			天照皇	3	ナ	ナ		知	71
			天照皇	3	小	小		ラヌ	844
			天照皇	3	返	返		又ハ	650
			天照皇	3	事	事		解	1.494
			天照皇	3				ラヌ	



## 理 想 の 人 物 (今の人)

今ノ人ト思フ人ハ誰	人員数	今ノ人ト思フ人ハ誰	人員数
天 皇 陛 下	289	大 限 侯 爵	3
乃 木 大 将	93	西 田 天 香	3
小 野 訓 導	59	皇 后 陛 下	2
皇 太 子 殿 下	37	専 務 取 締 役	2
工 場 長	31	村 会 議 員	2
明 治 天 皇	27	松 本 訓 導	2
父 母	26	大 山 大 将	2
乃 木 大 将 夫 人	22	塚 本 ハル子	2
下 田 歌 子	20	東 郷 大 将	1
工 場 掛 長	15	舎 監	1
先 生	10	募 集 社 員	1
見 廻 リ	10	社 長	1
技 師 長	8	木 村 ヤス子	1
組 頭 掛	8	藤 田 トシ子	1
世 話 掛	8	鳩 山 春 子	1
総 理 大 臣	7	兄	1
鵜 沢 テ イ 子	7	矢 島 楫 子	1
役 付	6	中 岡 良 一	1
広 瀬 中 佐	5	知ラヌ (又ハ解ラヌ)	71
寄 宿 室 長	5	小 計	802
村 長	5	返 事 ナ シ	692
役 人	5		1.494

(2) 日本人の生活には、「曾て我々の間に住み、我々と共に喜怒哀楽した人たちを、其死後一定の期間を過ぎ、若しくは一定の条件の下に、大よそ従来の方に違うて一社の神に齎し、祭り拝み且つ祈る」風習があった。そのため日本人は「死ねば祭られるものと信じ、それを確実にするために、めいめいも生きているうちは他意もなく先祖の祭を営んでいた」といわれる。

柳田国男「人を神に祀る風習」(定本柳田国男集第十卷)

同 「魂の行くへ」 (定本柳田国男集第十五卷)

色川大吉『明治の文化』二四頁。

(3) 同右『明治の文化』三〇七、三〇八頁。

(4) 安丸良夫「戦後イデオロギー論」(『講座日本史』八)。

## あとがき

すでに明らかなように、この小稿は、天皇制イデオロギーとしての「忠」「孝」が現実にとどの程度浸透していたかを女工意識の考察を通して検討したものである。何故、この問題をここにとりあげたのか。それは次の疑問をもったからである。

天皇制のイデオロギー攻撃の中にあつて、公然とたちあがり、たちむかった民衆は別として、自己を主張すること、また何ら行動にたちあがることもしなかった民衆は、天皇制支配がその精神的領域にまで貫徹し、支配体制の中に全く包摂された如くにとらえられているが、果たして本当に包摂されていたのか。天皇制イデオロギーとは民衆意識の基底の部分にまで浸透しえるほど、強力かつ完璧なイデオロギーであつたのだろうか。

そこで、私は自己主張などありえないものとして考えられていた女工に焦点をあて、天皇制イデオロギー支配下の女工意識の検討を試みた。

その結果は前述した如くである。それでは、こうした女工意識における「忠」と「孝」両者の関係は、ファシズム期においてはどのような変化をこうむったのか、また天皇制は非常に完璧にみえるファシズム体制を如何にして構築していったのか、が今後に究明すべき課題となろう。